



高原の風だより

2018(平成30)年10月 発行 <第14号>

御嶽の山頂を目指す人の列

～三岳 黒沢口登山道の規制を解除～

多くの尊い命が失われ戦後最悪の噴火災害と言われる御嶽山の噴火から早4年。噴火警戒レベルは昨年8月に1(活火山であることに留意)に下がったものの地元ではおおむね火口から1km圏内の規制を続けてきた。

そしてこのほど木曽町では、山頂付近のシェルター(避難壕)や異変を知らせるスピーカーの設置、登山道の整備など安全面の対策が整ったとして規制を解除。三岳の黒沢口登山道の二ノ池手前から山頂までの約600mについて、9月26日から10月8日までの13日間にわたり通行が可能になった。私も実際に自分の目でその状況を確かめ、犠牲になられた方のご冥福をお祈りしたいと10月7日、御嶽山を目指した。



美しい紅葉が登山者の疲れを癒す(8合目の女人堂付近)

紅葉が登山者の疲れ癒す

10月7日は時折日が差すまじまじの天気恵まれた。午前8時前、ロープウェイ乗り場の駐車場はすでに満車。県内外から多くの登山者が頂上を目指した。ロープウェイを降り行場山荘辺りから人が多くなり、登山道は所々で人の長い行列ができた。

8合目の女人堂を過ぎるとナナカマドなどの紅葉が見頃で、登山の疲れを癒してくれた。そして9合目を過ぎ、パッと霧が晴れると目の前に山頂が見えてきた。

パトロール隊員が安全指導

山頂と二ノ池の分岐には、パトロール隊員がいて安全指導を行ったり、登山者の質問に答えたりしていた。

私もここから持参したヘルメットをかぶり山頂を目指した。登山道は予想以上に良く整備されていて、とても歩き易かった。



列をなして山頂を目指す登山者



安全指導をするパトロール隊員

世界でも稀にみる悲劇を風化させてはならない

～ 慰霊碑に安全対策誓う ～



階段を登りきると山頂に着く



噴石で頭部がなくなった石像などが噴火の凄さを物語っていた

噴火災害の凄さ物語る

～頭部がなくなった石像や壊れた石碑など～

ヘルメットをかぶり登った4年ぶりの山頂は、今なお降灰が残り建物が壊れ往時の面影は感じられなかった。石の階段を上ると3067mの御嶽山の頂上（剣ヶ峰）に着いた。噴石で壊れた石碑や頭部がなくなった石像、階段下に目をやれば壊れたままの建物など当時の噴火災害の凄さを物語っていた。



頂上に立つ私



身動きが取れないほど混み合う山頂

建築資材なども置かれ狭い山頂では、標高が刻まれた石柱の前で記念写真を撮る人の列ができ身動きが取れないほどだった。私は並ぶのがイヤだったので1枚だけ写真を写してもらいすぐに下山した。

噴石から身を守るシェルター

～3基 90人の避難が可能～

山頂手前のかつて御嶽頂上山荘があった場所には今、シェルター（避難壕）が3基設置されている。コンクリート製のシェルターは厚さ20cm、高さ2mで奥行きが4mあり、1基に30人、3基で90人が避難することができる。

屋根や壁には噴石から守るため、防弾チョッキなどにも使われる*アラミド繊維を使用している。

当日、晴れ間は見えても山頂付近は時折、強風が吹き体が一気に冷え込んでしまうほど。そういう中、登山者らがこのシェルターに入り身支度を整えるなど休憩を取っていた。

*アラミド繊維：人工の高機能性繊維。強度や耐熱性に優れ、防弾チョッキをはじめ産業資材用途を中心に幅広く使用されている



シェルターに入り休憩する登山者

未来永劫安全な山になること誓う

～山頂に犠牲者追悼の慰霊碑～



犠牲者を追悼する慰霊碑

山頂直下にはシェルターと並ぶようにして慰霊碑が建立されている。「安らかに」と碑文が刻まれた慰霊碑の前で、多くの登山者が手を合わせていた。私も犠牲になられた方々の冥福を祈った。

碑の側面には木曽町長と王滝村長名で噴火の概要や救助捜索活動の内容などが刻まれ、もう一方の側面には噴火災害犠牲者慰霊碑建立実行委員会の委員長（木曽町議長）と副委員長（王滝村議長）名で、銘文が刻まれている。そこには「噴石で多大な人命を失うという世界にも稀にみるこの悲劇を風化させることは許されない」とした上で「自然に対する警戒心や備えが十分でなかったことを省みて監視体制や情報提供、防護施設などの安全対策を進める」とし、「63名の方々に哀悼の意を表し、未来永劫安全な山とすることを誓う」と記されている。

二ノ池山荘に改名 ～収容人数70人～

二ノ池本館は、二ノ池のすぐそばにある山小屋で噴火口からの距離は約1 km。噴石で屋根が壊れ、建物の老朽化もあり再建のめどが立たないため所有者から町が譲り受けた。町は昨年か建て替え工事を始め、このほど完成した。建物は名称を「二ノ池山荘」と改名し、木造2階建てで、収容人員は70人。屋根や壁にはシェルターと同様にアラミド繊維が使われ、噴石対策を講じている。登山者の休憩や宿泊のほかパトロール隊員の拠点施設にもなる。事業費はおよそ1億1900万円。



完成間近の二ノ池山荘

日本一の高山湖 景色一変

～コバルトブルーの美しさ消え～



山頂から二ノ池を望む(降灰で色が違って見える)



霧がかかり神秘的な二ノ池

二ノ池は標高 2900m、日本で一番高い所にあるコバルトブルーの美しい池だった。そんな二ノ池に噴火の際は多くの灰が降り注ぎ景色は一変した。池は灰でかなりが埋まり、山頂から眺めると灰が積もった部分は、はっきり色が違って見えた。

二ノ池で降灰を踏みしめて佇んでいるとにわかに霧がかかり辺りが薄暗くなった。

火山防災と山の魅力発信

～初代の御嶽山火山マイスターに8人～

今年4月、御嶽山火山マイスターに8人が決まった。マイスターはドイツ語で、親方・師匠という意味。面接や筆記試験で合格した8人は、公民館長や学校教諭など職業もまちまち。今後、御嶽山の火山防災を

呼びかけるとともに山の自然や歴史、文化などの魅力を伝える役割も担う。

山小屋で働いた経験もあり公民館長も務める王滝村の澤田義幸さん(62歳)は「これから二度とこのような悲惨な災害を繰り返さないために、外部講師を呼ぶなどして一層知見を深めながら登山者に注意喚起を図っていききたい。また、防災だけでなく火山が造る自然の魅力や人々の暮らしなども伝えていければ」と話している。

御嶽山火山マイスター名簿 (順不同、敬称略)

澤田	義幸	(王滝村)	王滝村公民館長
立花	裕美子	(〃)	王滝村集落支援員
稗田	実	(〃)	王滝村職員
川上	明宏	(木曽町三岳)	三岳小教諭
向井	修一	(〃)	石室山荘経営
竹脇	聡	(〃 開田高原)	木曽観光連盟職員
小林	夏樹	(〃 福島)	一般社団法人「木曾人」代表
笹川	隆広	(木祖村)	山岳ネイチャーガイド

御嶽山の山小屋で頑張る！

高岡 ゆりさん（46歳・木曽町福島）

今回、「ご長寿列伝」はお休みし、御嶽山二ノ池新館の新しいオーナー、高岡ゆりさんをご紹介します。高岡さんは改修した新館の建物を「二の池ヒュッテ」と改名し、新たな気持ちで出発しました。

アットホームな山小屋目指す ～ 2か月余りの営業で手応え ～

東京生まれの高岡さんは、千葉県育ちでシステムエンジニアとして働いていた。30歳代から登山を始め、毎年夏には職場の長期休暇を利用して長野と山梨の県境にある奥秩父にある山小屋でアルバイト。42歳で会社を辞め、調理師免許を取得。奥秩父に近い山梨県北杜市に移住して山小屋の仕事に専念していた。

そして昨年4月、二ノ池新館が新しいオーナーを募集していることを新聞で知り、話だけでも聞いてみようという軽い気持ちで連絡。ほかにも応募者がいたが、今までの経験



高岡ゆりさん



が評価され話が決まった。その後、現地を2度ほど訪ね、御嶽山の美しい景観と最高の立地にある山小屋に惚れ込んだ。今年6月にはさっそく住民票も木曽町に移し、山小屋の改修工事に着手。山梨などからの登山仲間や二ノ池新館の元番頭などにも協力してもらい8月11日に念願のオープンにこぎつけた。

「自分の調理師の経験を生かし、美味しい料理が食べられるアットホームな山小屋にしたい」と話す高岡さん。確かに私が食べた鍋焼きうどんも絶品で、他の登山者も一様に美味しいとベタ褒めだった。

大災害が起きた山小屋での営業については、「葛藤がなかったわけではない」という高岡さん。山に対する畏敬の念を忘れてはならないと感じている。そんな思いから噴石

オープンした「二の池ヒュッテ」の前に立つ高岡さん

被害のあった一部屋は今でもそのまま保存している。

オープンから10月7日まで2か月余りの営業を終え、手応えも感じつつ「ボランティアなど多くの人にお世話になって営業することができた」と感謝の言葉を口にする高岡さん。小屋の傷みなど施設の維持が課題としつつ、来季に向けさらなる意欲がにじむ。

私の本棚

緊急報道写真集『御嶽山噴火』（発行：信濃毎日新聞社）

2014（平成26）年9月27日、午前11時52分、突如噴火した御嶽山。紅葉が見頃で、好天に恵まれた土曜日の昼前だったこともあり多くの人が登頂して犠牲になった。

本書は噴火から一ヵ月後に緊急報道写真集として信濃毎日新聞社から出版されたもの。カラー写真をふんだんに使い、登山者が捉えた噴火の瞬間や下山や避難、警察や消防、自衛隊などの捜索活動などの様子を時系列で伝えている。

編集後記

御嶽山噴火から4年が経過し、初めて規制が解除されたこ

とから遺族をはじめ多くの人々が頂上を目指した。私も今回、久しぶりに山頂に立ち慰霊碑の前で犠牲者の冥福を祈念しながら様々な思いをめぐらした。これからハード、ソフト両面から安全対策が講じられ、徐々に登山客も増えることが推測されるが、山頂一帯で多くの人が犠牲になり、今なお行方不明者がいるという現実を忘れず、遺族の気持ちに寄り添う思いを大切にしなければと感じている。そして何よりも御嶽山（おやま）に対する畏敬の念をいつまでも持ち続けることが肝要だと考えている。



編集・発行者： 大目 富美雄（おおめ ふみお）

〒397-0301 長野県木曽郡木曽町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661

携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com